

江戸の科学書を中心に見た十二宮の名称について-双児宮を中心に-

大阪工業大学 米田達郎

1 はじめに

1810（文化7年）に藤林淳道（普山）が『蘭学逡』を記している。本書では七曜などが紹介され、その中で十二宮の名称が記されている。翻訳語名で挙げれば次のようなものである。なお挙例の際に一部省略していることを断っておく。

1 『蘭学逡』

白羊 金牛 **双女** 巨蟹 獅子 室女 天秤 天蝸 人馬 磨羯 寶瓶 双魚

（文明源流叢書一卷所収 253頁の表から）

元々『蘭学逡』はオランダ語辞書『訳鍵』の付録としてあった文法書が元となっている。『訳鍵』は稲村三伯の『波留麻和解』を簡略化したものであるが、蘭和辞書として学者たちに利用されていたという事実がある。当時の蘭学者に影響を与えていたと考えられる。しかしこの資料だけで十二宮、特に双児宮の名称が決定したわけではない。双児宮の名称は、仏教・西洋からの影響を検討するべきである。

2 仏教での双児宮

宿曜経から整理した上で抜粋しておく。

2 宿曜経

宿曜経云。

第一宮。其神如師子。故名師子宮。主加官得財。

第二宮。其神如女。故名女宮。主妻妾婦人。 第三宮。其神如秤。故名秤宮。主寶庫。

第四宮。其神如蝸。故名蝸宮。主禁病剋身。 第五宮。其神如弓。故名弓宮。主壽慶得財。

第六宮。其神如磨。故名磨宮。主鬪諍。 第七宮。其神如瓶。故名瓶宮。主勝強之事。

第八宮。其神如魚。故名魚宮。主加官益職。 第九宮其。神女羊。故名羊宮。主兩足人事。

第十宮。其神如牛。故名牛宮。主四足畜牧之事。第十一宮。其神如夫妻。故名夫妻宮。主子孫事。

第十二宮。其神如蟹。故名蟹宮。主官府口舌

法隆寺蔵星曼荼羅、東寺火羅図、春日龍樹箱などにも十二宮は描かれる。また『本命抄』（保元二（1157）年書写）には「本命宮者 双魚宮・白羊宮・青牛宮・陰陽宮・巨蟹宮・師子宮・少女宮・秤量宮・蝸虫宮・人馬宮・磨羯宮・寶瓶宮」（十二宮の名称のみ抜粋）とある。なお『宿曜運命勘録』（天永3（1112）年）にも同じく陰陽宮とある。江戸時代になると、仏教の世界でどのように描かれているかを確認してみると、天明3年（1783）鈴鹿文庫蔵『増補諸宗仏像図彙』では次のように記される。なおレジメでは図を省略している。

3 『増補諸宗仏像図彙』

双女宮 獅子宮 塙蟹宮 **男女宮** 午密宮 白羊宮 双魚宮 磨羯宮 寶瓶宮 弓宮 蝸蟲宮 秤量宮

江戸の資料の中、今回確認したのは本書のみである。基本的な概念は現行のものと大きくは変わっていないが、名称は変化する（獅子宮・白羊宮・双魚宮・磨羯宮は現行と同様）。今回問題としている双児宮は男女宮である。なお、『蘭学逡』にあった双女宮は、上記のものでは乙女座のことである。今回の調査からは双児宮の名称は仏教由来でないといえる。

3 西洋翻訳書にみる双児宮

3.1 中国経由の西洋書とその影響

4 『坤輿万国全図』(1602) マテオリッチ作

白羊・金牛・双児・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

5 『天経或問』(1675) 游子六

白羊・金牛・陰陽・巨蟹・獅子・双女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

→ マテオリッチ他の著作を多く引用しているが、変更を加えている。双子宮（と処女宮）に変更を加えた理由は不明である。

4・5 は日本で出版されたこともあってよく読まれ、また注釈書も多くなされたものであることから、日本における影響力はあったと思われる。例えば、井口常範『天文図解』(1688)では『坤輿万国全図』の順番と名称を踏襲している。また『天経或問』は西川如見・正休親子に影響を与えており（「天経或問」の訓点本がある）、如見の著作では例えば用例 6 のようになっている。

6 『大略天学名目抄』(1712) 西川如見

今来紅毛人持渡レル処ノ星図ヲ看ルニ、其星ノ形皆獸類ノ像ニ配シテ、其星ノ様体、唐土ノ名クル形ニハ非ズ（中略）戎蛮紅毛等星宿ヲ以テ獸形ト為ル事ハ、中華ニ於テ三十六禽ヲ定メテ星宿ニ配シテ方角ヲ主ドラシムルニ似タリ（乾の巻）

磨羯・人馬・天蝸・天秤・双女・獅子・巨蟹・陰陽・金牛・白羊・双魚

3.2 洋学（蘭学）書

7 『二義略説』(1667) ペドロ・ゴメスの『天球論』を翻訳したもの。小林謙貞著

右ノ黄道ヲ十二分ニワリテ、其一ヲ宿ト号シ、十二獸ノ名ヲ付タリ。一宿各三十度ナリ。獸ノ名ヲ付タルコト、十二宿星ノナラベル形、其獸ニ似タルユヘナリ。

羊宿・牛宿・二子宿・蟹宿・獅子宿・小女宿 コノ六宿ハ北ニアリ。

天秤宿・龍宿・射手宿・野牛宿・流水宿・魚宿 コノ六宿ハ南ニアリ。

比等ノ宿ニ随フテ、四節隔テ分レタリ。太陽、白羊・金牛・双児ヲ通ル間ハ春ナリ。巨蟹・獅子・室女ヲ通ル間ハ夏ナリ。天秤・天蝸・弓馬ヲ通ル間ハ秋ナリ。磨羯・流水・大魚ヲ通ル間ハ冬ナリ。（第三・諸国宿循環ノ不同ヲ頭ハス輪線ノ事）

8 『紅毛談』(1765) 以下のようにそのまま音を書き表したのものもある。

子の方をおらんだにて、あくはありやすといふ。

かあべる・さぎたありやす・じごるひやす・りふら・ひるご・れを・かんける

きみに・たうりす・びしす

是十二にて、日本の子より亥までの十二支に相当れり。

9 『天学指要』(1778) 西村遠里

宝瓶・磨羯・人馬・天蝸・天秤・双女・獅子・巨蟹・陰陽・金牛・白羊・双魚

右西域ノ名目モ星象ヲモツテ名ツケタルモノ也。和蘭ノ名目ハ又異ナリ。愚ガ天経或問註解ニ載ス于此畧之。→羊・牛・二子・蟹・獅子・女・秤・蛇虫・弓人・野牛・水人・魚（十二象紅毛とある部分を指すか。『天経或問註解』）

10 『天球全図』(1796) 司馬江漢 本多利明『西域物語』1798年も名称は同じ。

白羊宮 金牛宮 陰陽宮 巨蟹宮 獅子宮 室女宮 天秤宮 天蝸宮

人馬宮 磨羯宮 宝瓶宮 双魚宮

11『遠西観象図説』(1823) 吉雄南犀

白羊宮・人馬宮・宝瓶宮・**双児宮**・双魚宮・磨羯宮・
天秤宮・天蝸宮・金牛宮・巨蟹宮・獅子宮・室女宮

吉野政治(2014)では江戸時代の十二宮の名称を調査し『坤輿万国全図』系(以下坤輿系)と『天経或問』系(以下或問系)として以下のように分類している。

坤輿系: 白羊・金牛・**双児**・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

或問系: 白羊・金牛・**陰陽**・巨蟹・獅子・双女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

その上で、「洋学者に「双児」が使用されることが多いことを踏まえれば、名称については坤輿系の影響が強かった」と述べる。用例9の『天学指要』では十二宮を挙げた後に「右西域ノ名目モ星象ヲモツテ名ツケタルモノ也。和蘭ノ名目ハ又異ナリ。愚ガ天経或問註解ニ載ス于此畧之。」と中国経由の名称とオランダのものとは異なることを述べる。そうすると、十二宮に触れた各本が中国、洋学書などどの本に依拠したかによって、陰陽と双児という言い方になっていると理解できる。

12『和蘭訳筌』(1785) 前野良沢

アリウス 白羊・タウルス 金牛・**ゲミニ 双女**・カANCEL 巨蟹・レオ 獅子
ヒルゴ 室女・リブラ 天秤・スコロピオ 天蝸・サギタリウス 人馬
カプリコルヌス 磨羯・アクワリウス 宝瓶・ピスセス 双魚

13『気海観瀾広義』(1851) 川本幸民

白羊宮・金牛宮・**双女宮**・巨蟹宮・獅子宮・室女宮・
天秤宮・天蝸宮・人馬宮・磨羯宮・宝瓶宮・双魚宮

しかし用例1・12・13などには「双女宮」とある。さらに宇田川榕庵『蘭学重宝記』でも双女となっている。用例10では「陰陽宮」となっているが、文化5(1808)年の司馬江漢『刻白爾天文図解 卷上』では「双児即陰陽宮」とある。以上から、現行の「双子宮」は、洋学・中国などの影響から「陰陽宮・双児宮・双女宮」と複数の呼び名が江戸時代には存在し、併用されていたとするのが妥当と思われる。

4 明治以降の双児宮

4.1 明治初期の天文学書を中心に

14『頒曆詳註太陽曆俗解 第2本』花井静 明治5(1872)年

白羊・金牛・**双児**・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

15『訓蒙窮理問答』卷六 後藤達三 編述 明治5(1872)年

白羊・金牛・**双女**・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

(参考) 窮理問答小引から抜粋

米国ベエカー氏の初等窮理書の如き【中略】一書を訳編し題して訓蒙窮理問答と名付けて、世に公けにす。希くは童蒙婦女をして此学の一斑を窺らしめんとす。

16『星学捷徑』上巻 関藤成緒 訳 文部省出版 明治7(1874)年

白羊・金牛・**双女**・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

(参考) 序文: 天文ノ学ニ志ス幼年輩ハ須ク諸天体ノ運動変化ヲ専ラ購究シテ茲ニ述ル諸説ノ当否ヲ明カニ辨知スベシ総テ初学ノモノ後来高上ナル天学ヲ講習スル基礎ヲ為スノ術之ニ如クモノナカルベキナリ

17『訓蒙天文略論』 林董譯述 明治9 (1876) 年

白羊・金牛・双兄・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

18『畫入小學讀本字引卷之二』 水溪良孝編輯 明治9 (1876) 年

白羊・金牛・双女・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

19『日月地球渾天儀用法』 中川重麗 明治10 (1877) 年

白羊・金牛・双女・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

20『泰西名数学童必携 卷之1』 加藤高文 明治12 (1879) 年

白羊・金牛・双兄・巨蟹・獅子・室女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

21『天文地学講話』 横山又次郎 早稲田大学出版 明治42 (1909) 年

白羊・金牛・双女・巨蟹・獅子・処女・天秤・天蝸・人馬・磨羯・宝瓶・双魚

→大学の教科書でも「双女」と教えている。

22『星』 一戸直蔵 裳華堂 pp13-14 明治43 (1910) 年

西洋では天空上太陽の行く道の近傍一帯を獣帯又は黄道帯と称して、之を十二個の星座に分ち、
(中略) 近頃我国の天文学者一同の評議で訳語を一定したから、其方を主として従来のは併せて
記すこととした。

牡羊〈白羊〉 牡牛〈金牛〉 双子〈双女〉 蟹〈巨蟹〉 獅子〈獅子〉 処女〈処女〉

天秤〈天秤〉 蠍〈天蝸〉 射手〈人馬〉 山羊〈磨羯〉 水瓶〈寶瓶〉 魚〈双魚〉

→上記から、「双子」は明治 43 年 (1910) には学術的な判断で「双女」から変更したといえる。

23『星のしるべ』 児童天文学 塩沢孝寛 東京測量台 大正12 (1923) 年

【双女座】 ジェミニ 金牛座ノ畢五ヨリ東方ニ當リ 【中略】 北河二ハ一名 (カストール) ト云ヒ
北河三ハ一名 (ボルロックス) ト云フ。

4.2 なぜ「双子」が選択されたか

「双女」で問題はなかったと思われるが、なぜ「双子」に変わったかというのが問題として残る。
用例 5・6・9 にあるように、現行の乙女座を「双女」としているのもある。重複を避けたか？

「双子」を選択する下地はあった。「双兄」「双女」は『日本国語大辞典第二版』、『大漢和』に立項されていないが、「二子」は『日本霊異記』「母屋裏。二子見」(182 頁)、『覽富士記』(中世日記紀行集)「なほ万代遠くおぼゆべき富士のよそめの今日の面影二子塚と申し侍りし所にて」(468 頁) などあり、『書言字考節用集』にも「孿 双兒」(4巻55) とある。18世紀初頭に活躍した近松門左衛門は「双生隅田川」と題した時代浄瑠璃を執筆している。「双生」の表記も通用していたことを示す。『紅毛十二宮名号図解』には「双兒ノ形」と記される。「双女」から「双子」へと変化したのは、十二宮の名称で重複を避けるため「双子」を充てたのではないかと推測され、その下地は『二義略説』や『天経或問註解』にあったと思われる。

【参考文献】

- ・ 一戸直蔵 (1910) 『星』 裳華堂
- ・ 吉野政治 (2014) 『蘭学訳述攷』 和泉書院
- ・ 株本訓久 (2013) 「日本における最初の現代天文学の専門書 (1) ～明治初期の日本における天文学書～」 天文教育 Vol25 pp11-24

- 【使用テキスト】
- ・ 『文明源流叢書』 卷一～三
 - ・ 近世歴史資料集成 天文学編 (1) ～ (12)
 - ・ 国立国会図書館デジタルコレクションを利用。